素朴なる認識論 一ゴールディング『後継者たち』に みる感受性と想像力の問題—

杉村泰教

Primitive Epistemology: The Problem of Sensibility and Imagination in *The Inheritors*

Yasunori Sugimura (昭和60年10月25日受理)

'A picture in the head' which William Golding contrives in *The Inheritors* not only reproduces the language of ancient people to amuse the reader, but poses a fundamental problem of our sensibility and imagination. The Neanderthals always spread highly sensitive antennae to perceive the state of affairs around them. This intuitive insight includes memory and anticipation, and their imaginative faculty is generated from this simultaneous perception of the past, the present, and the future. The pictures thus acquired are transmitted almost perfectly to others. Their pictures have 'poetic brilliance', and the community shares the lively passion to form the image of the Earth Mother 'Oa'.

On the other hand, the New People's language is far more excellent than the Neanderthals' in terms of fluency and the speed of communication. But 'intuition' and 'pictorialization' disappear from the New People. They cannot communicate their passion any more, so that the community lacks the lively contact. The pent—up passion degenerates into jealousy, malice, and a desire for power.

In this paper, I'd like to treat the behavioral difference between two human races not as 'good and evil' dichotomy, but rather as the problem of sensibility and imagination inherent in our speech act and perceptive function.

1

ゴールディング(William Golding)が、『後継者たち」(The Inheritors)の中で見せたネアンデルタール人の「頭の中の絵」による言語活動は、単に古代人の言語を興味本位に再現したというだけにとどまらず、現代に生きる人間の感受性や想像力に対して、鋭い問題提起をしているように思われる。実際、この作品を読み進めてゆくうちに、ネアンデルタール人と読みもサピエンスの人類学的区別など、はやばやと読者の頭から消え去り、我々の内なる魂の問題が次第に主要な関心となってくるのである。代表作「蠅の王」(Lord of the Flies)で扱われたテーマは、ここでも一貫して追求されている。登場人物を取り巻く自然環境も、「蠅の王」の無人島に似て変化に富み、様々な現

象が我々の目を捉える。水、霧、霞、氷、そして光の躍動、木々の息吹、昆虫や鳥、小動物の生き生きとした姿、天体の神秘、一方において弱肉強食の生存競争、暗闇。いずれの要素も互いに他と拮抗しあって存在し、価値が様々に錯綜して、ゴールディング独特の世界を展開している。このような環境の中で、'Oa'という大地女神を信仰し、長老の統率の下に秩序整然とした生活を送るネアンデルタール人は、ホモ・サピエンスよりはるかに豊かな精神生活を営んでいるということができる。彼らは、現象を鮮明に捉え、それを頭の中で映像にして音声で伝達する。それが彼らの言語である。一つの現象をうけとめる時、彼らは、眼前の光景と同時に、過去の記憶や情念、未来の予測などを合わせて捕捉しているのだ。

この直観が、「声」によって相手に伝達されるという

ところには、ソシュール (Ferdinand de Saussure)の「聴 覚映像」(image acoustique), あるいはデリダ(Jacques Derrida) のいう「現象学的声」²に近いものが認められる。こ のような直観の中では、同時に反省も行なわれてい る。ネアンデルタール人は、「知覚、記憶、予期、想 像、判断など、およそ反省の対象となるものをすべ て同一時間内で」、瞬間的に把握しているのである。 伝達する内容をいちいち映像化するという幼稚な作 業では,多くの情報量を伝達することはできないが, この映像が失われてしまえば、いかに多くのことば を発したとしても、そこに反省の機能が欠けている ために、自分の行動を、その都度、制御することが できない。この作品の中で、ホモ・サピエンスのほ うが、ネアンデルタール人よりも一層、本能をむき 出しにする行動が多いのは、前者の言語活動に、こ のような行動を自ら規制する機能が備わっていない からではなかろうか。

私は、ネアンデルタール人とホモ・サピエンスの 行動形態の相違を、単に、「無垢」と「汚れ」として捉え るのではなく、ともに我々自身の行動のパターンに 内在しているものと考えたい。⁴ そして、その差異を、 倫理や宗教、あるいは人格の面から考察するよりは むしろ、人間一般の言語活動や認識作用にかかわる 根本問題として追求したいと思う。

2

「聴覚映像」を媒介とするネアンデルタール人のこ とばは、情念をほとんど失うことなく伝達できると いう点で、本来的なコミュニケーションを可能にし ている。一人が「映像」を持つと、他の者は、細心 の注意を払ってこの「声」に耳を傾け、この映像を崩 さないように互いに支えあい,5 ほぼ完璧ともいえる 情報交換がかわされている。彼らのコミュニケーシ ョンは、「同じ絵を分かち合う」ことによって成立し ているのだ。6 ここでは「能記」(signifiant)と「所記」 (signifié)が限りなく近接している。 彼らの映像は単 純であり、とりわけロク(Lok)に於いては,欲求と情 念が未分化であるように思われる。しかし、それだ けに情念は潑剌としており、比喩も、粗雑ではある が新鮮である。彼の言語は「詩的な輝き」を帯びて いるといえよう。もし、この比喩が、洗練され、使 い古されてくれば、彼らの感受性と超感覚的知覚能 力(extrasensory powers)は衰退するのである。ロクが 'like'という simile を発見したことすら,この衰退の 徴候なのだ。9

一方、「新しい人間たち」(the New People)に於いては、ネアンデルタール人に見られた「本能」や「直観的洞察」、そして「映像化」が姿を消している。。彼らは、もはや情念を伝えあうことができず、共同体は生きた接触を欠いて、一つの権力機構に組みこまれている。鬱積した情念は変質し、嫉妬や奸計、権力欲へと堕落する。

既に述べたように、この作品は、ネアンデルタール人の「純粋無垢」と、新しい人間たちの「堕落」を描いただけのものではない。彼らの言語活動や認識方法は、いずれも現代の我々の日常生活の中に窺われるものである。。作者が強調しているのは、むしろ想像力の問題であり、情念の完全な伝達であり、豊かな感受性なのだ。ネアンデルタール人の生活の場を描写する作者の筆は、まさしく詩人のものといえよう。この描写は、ネアンデルタール人の眼を通して見た風景と異なるものではない。

ここで、作品に描かれているいくつかの自然描写 や会話を辿ることにより、感受性の問題と、それを 支える言語活動について考察してみよう。

ネアンデルタール人は、つねに超高感度のアンテナを張りめぐらせて、彼らの周囲の状況を余すところなく、鋭敏に捕捉する。これによって獲得した映像は、その都度、彼らの心の中にくっきりと刻みこまれる。

One of the deep silences fell on them, that seemed so much more natural than speech, a timeless silence in which there were at first many minds in the overhang; and then perhaps no mind at all. So fully discounted was the roar of the water that the soft touch of the wind on the rocks became audible. Their ears as if endowed with separate life sorted the tangle of tiny sounds and accepted them, the sound of breathing, the sound of wet clay flaking and ashes falling in.

The sharp line of the horizon blurred and the forest lightened. There was a cloud rising over the waterfall, mist stealing up from the sculptured basin, the pounded river water being thrown back by the wind. The island dimmed, the wet mist stole towards the terrace, hung under the arch of the overhang and enveloped the people in drops that were too small to be felt and could only be seen in numbers. Lok's

nose opened automatically and sampled the complex of odours that came with the mist. (P.42)

Over the sea in a bed of cloud there was a dull orange light that expanded. The arms of the clouds turned to gold and the rim of the moon nearly at the full pushed up among them. The sill of the fall glittered, lights ran to and fro along the edge or leapt in a sudden sparkle. The trees on the island acquired definition, the birch trunk that overtopped them was suddenly silver and white. Across the water on the other side of the gap the cliff still harboured the darkness but everywhere else the mountains exhibited their high snow and ice. (PP.42-43)

しかし、翌日、彼らは、食料を確保するために、 虎に殺された牝鹿の死体を分解して肉をとり出す作 業を始める。

The doe was wrecked and scattered. Fa split open her belly, slit the complicated stomach and spilt the sour cropped grass and broken shoots on the earth. Lok beat in the skull to get at the brain and levered open the mouth to wrench away the tongue. They filled the stomach with tit-bits and twisted up the guts so that the stomach became a floppy bag. All the while, Lok talked between his grunts. "This is bad. This is very bad." Now the limbs were smashed and bloodily jointed. Liku crouched by the doe eating the piece of liver that Fa had given her. The air between the rocks was forbidding with violence and sweat, with the rich smell of meat and wickedness. "Quick! Quick!" (P. 54)

周囲の風景にも暗さが漂ってくる。

... there was a kind of darkness in the air under the watching birds. (P. 54)

作業の間中,ロクは,"This is bad"と言い続け,フェイ(Fa)は,一刻も早くその場から立ち去りたいという思いからであろうか,"Quick! Quick!"とロクをせきたてる。ここには,彼らの心に刻みこまれていた過去の心象風景の射映がある。二つの風景は,ロクの心の中で激しくぶつかりあい,彼を苛立たしい気分にさせる。しかし,想像力は,今の知覚と過去の

記憶をひっくるめて把握するところから生み出されるのである。彼らの頭には、大地女神'Oa'のイメージが浮かび上るのだ。

Lok spoke loudly, acknowledging the darkness. "This is very bad. Oa brought the doe out of her belly." (P. 54)

この作品の中で、作者が展開する「素朴なる認識 論」4の拠りどころは、ネアンデルタール人が、真実 の全体像を、あらゆる側面から、とぎれることなく、 かつ具象的に捉えている点にある。5 サルトル(Jeanpaul Sartre) によれば、「すべての現実存在は、現在、過 去、未来の構造をそなえてあたえられ、そのうちで 過去と未来とは現実物の本質的な構造部分として存 在」している。したがって, 現実の対象を知覚する ということは、それを、過去の記憶や未来の予見の 領域を備えたものとして把握することである。この ように「世界を綜合的全体として措定する作用」は、 「世界に対して《一歩後退した態度をとる》作用」 と異なるものではなく、想像力は、この「総体とし て把握された現実界から一歩後退した態度をとる」 ところから湧き上るのである。6 ネアンデルタール人 は、眼前の光景のどんな僅かな変化も見逃さず、い つも過去の記憶に照らして知覚し, 同時に未来をも 予測している。いわば、「現在の中に過去と未来がぶ つかり合っている」7のだ。彼らの想像力の背景には、 このような認識方法がある。一見すれば、単に古代 人のものの見方を再現したにすぎないような描写の 中に, 実は最も今日的な問題が含まれているのであ る。例えば、ロクは、新しい人間の出現をつぎのよ うに捉える。

The moon was caught round the rocks and they were outlined. As he watched, one of the farther rocks began to change shape. At one side a small bump elongated then disappeared quickly. The top of the rock swelled, the hump fined off at the base and elongated again then halved its height. Then it was gone. Lok stood and let the pictures come and go in his head. One was a picture of a cave bear that he had once seen rear itself out of the rock and heard roar like the sea.... This thing, this black changing shape, had something of the bear's slow movement in it. He screwed up his eyes and peered at the rock to see if it would change again.... The blob of darkness seemed to coagulate round the stem like a drop of blood

on a stick. It lengthened, thickened again, lengthened. (Italics mine.) (P. 79)

目の前の得体の知れない黒い影は、かつて見た 'cave bear 'の記憶を蘇らせるが、ロクは、さらに、次の 変化を予測する。暗黒の塊が、幹の周囲に血のよう に凝固して、伸びたり太ったりしている。その様子 がどうもおかしい。現実の光景に、記憶と予期が入 り交じり、複雑に絡みあったイメージがロクの頭の 中を駆け巡る。恐怖におののいたロクは、新たな映 像が作り出せないままにフエイの後を追うが,その光 景から一旦遠ざかった時、彼の心の中にようやく, まとまったイメージが醸し出されてくるのである。 それは、彼らが畏怖している'ice women'のイメージ である。大地女神'Oa'の恐ろしい一面を象徴する 'ice women'は、現実の光景を素地にして、彼らのイ マジネーションが創り上げたものである。'Oa'は, 'blood'に関連したイメージを背景にして現れる。既 に述べたように、虎が殺した鹿を解体する場面にも, 'Oa'が出現する。この大地女神のイメージは,彼ら を血から遠ざけるのだ。彼らが、現実の世界を越え ることによって創るイメージは様々だが,これらを 心の奥の最も深い処でつなぎとめているものは、こ の大地女神'Oa'である。したがって、彼らの心象は 程よく抑制され、堕落したものにならない。天体や 自然の現象を基調とした風景は、すべて大地女神の 一部なのだ。虎が殺した鹿の肉を料理する時の一種 異様な光景も、それを余すところなく完全に捉えな がらも、そこにのめりこむことなく、「一歩後退した 態度」で接し,最後には見事に超越している。

さらわれたリク(Liku)の悲鳴をキャッチするロクの聴覚も、新しい人間に殺害された'old woman'が、川の中を転がりながら流れ去ってゆく光景を捉える視覚もほとんど完璧である。現実の対象は、記憶と予見の領域を備えたものとして、綜合的に把握されている。

The screaming tore him inside. It was not like the screaming of Fa when she was bearing the baby that died, or the mourning of Nil when Mal was buried; it was like the noise the horse makes when the cat sinks its curved teeth into the neck and hangs there, sucking blood. Lok was screaming himself without knowing it and fighting with thorns. And his senses told him through the screaming that Liku was doing what no man and no woman could do. She was moving away across the

river. (P. 105)

The weed-tail was shortening. The green tip was withdrawing up river. There was a darkness that was consuming the other end. The darkness became a thing of complex shape, of sluggish and dreamlike movement. Like the specks of dirt, it turned over but not aimlessly. It was touching near the root of the weed-tail, bending the tail, turning over, rolling up the tail towards him. The arms moved a little and the eyes shone as dully as the stones. They revolved with the body, gazing at the surface, at the width of deep water and the hidden bottom with no trace of life or speculation. A skein of weed drew across the face and the eyes did not blink. The body turned with the same smooth and heavy motion as the river itself until its back was towards him rising along the weedtail. The head turned towards him with dreamlike slowness, rose in the water, came towards his face. Lok had always been awed by the old woman though she was his mother.... Though she wrapped them all in her understanding and compassion there was sometimes a remote stillness in what she did that left them humble and abashed. Therefore they loved her and dreaded her without fear, and they dropped their eyes before her. But now Lok saw her face to face and eye to eye, close. She was ignoring the injuries to her body, her mouth was open, the tongue showing and the specks of dirt were circling slowly in and out as though it had been nothing but a hole in a stone. Her eyes swept across the bushes, across his face, looked through him without seeing him, rolled away and were gone. (PP. 108-109)

そして、ついに彼を殺害する目的で毒矢が飛んでくるのだが、彼は、これをも一歩距離を置いて眺めている。これが人間を殺害する武器であること、つまり、血の臭いのしみついたものであることを'Oa'からの予示によって知ったフェイは、ロクを説得して矢を捨てさせるのである。ここに至って彼らは、ようやく、新しい人間たちに、血の臭いを感じ始める。マル(Mal)を殺し、ヘイ(Ha)を殺し、ニル(Nil)と

'old woman'を殺し、リクと赤ん坊をさらっていった のは、この新しい人間たちなのだ。

"Oa did not bring them out of her belly."
(P. 173)

しかし、ロクは、フェイが傷を負って血を流しながら逃げ去った後も、その現実の光景をのり越えて、 自然の豊かなイメージを描き出すのである。

There was pink in the sky and a new green in the tops of the trees. The buds that had been no more than points of life had opened into fingers so that their swarms had thickened against the light and only the larger branches were visible. The earth itself seemed to vibrate as though it were working to force the sap up the trunks. Slowly as the sounds of his mourning died away Lok attended to this vibration and was minutely comforted. He crawled, he took up bulbs with his fingers and chewed them, his throat rose and swallowed. He remembered his thirst again and went crouched and questing for firm ground by the water. He let himself head down from a raking branch, held with one hand and sucked at the dark onyx surface. (P. 190)

3

新しい人間たちに、感受性と想像力が欠けている 証拠は、彼らがロクの娘リクを焼き殺してその肉を 食らうという事実一つで十分である。さらわれたリ クは、少女タナキル(Tanakil)の恰好の遊び相手にな り、二人の間には、この新しい人間たちの世界では 貴重とも思えるほどの親密な友情が芽生え始める。 ここでもリクが肌身離さず携えている'Oa'の人形 が、二人のコミュニケーションを円滑なものにする 機能を果たしているのである。

Liku took the little Oa from her chest and balanced her on her shoulder. Suddenly the girl laughed, showing her teeth and then Liku laughed and they were laughing together. (PP. 153-154)

新しい人間たちは、暖かい友情が交わされるこの場面を破壊し尽くしてしまうのだ。それは、『蠅の王』の中でジャック(Jack Merridew)の一味が、山肌の木陰で憩う豚の親子に一斉に襲いかかる行為と同じ種類のものである。ジャック同様、新しい人間たちに

は、リクとタナキルが仲良く遊んでいる場面をほと んど認識することができない。人間性の善悪を問う 以前に、彼らは現実の全体像の把握すらできないの である。この場面を真に共有しているのは、リク、 タナキル,ロク,フェイ以外に誰も居ない。場面を把 握できない以上、そこからは何の想像力も生み出す ことができないのである。新しい人間たちが、頭に 思い描くことといえば、せいぜい異人種の娘を火あ ぶりにして、それを肴に酒を飲むといった sadistic で堕落したイメージなのだ。彼らの感受性の欠損は、 「蠅の王」や「ピンチャー・マーティン」(Pincher Martin), 『通過儀礼』(Rites of Passage)などでゴールディングが 見せた極限状況によるものとは異なる。ここでは、 特に言語環境が強調されているように思われる。彼 らは、この作品で見る限り、かなり高度な言語活動 を行っている。彼らの会話は、ネアンデルタール人 の幼稚なことばに比べて、ほとんど映像化の作業な しに流暢に運ばれているようだ。しかし、そこには 天体や自然現象のイメージが見られない。新しい人 間たちのことばは、伝達の速度に関して、ネアンデ ルタール人のものよりはるかにすぐれているが、イ メージの喚起力が極めて乏しい。『蠅の王』に於い て、無人島の窮迫した状況の中でも、サイモン(Simon) の感受性と想像力が爽やかな雰囲気をもたらし、そ れが一つの救いとなっていたように、この作品のム ードを支配するのはネアンデルタール人のことばに 窺われるサイモン風の感受性である。

遊に、理性の 僕となったホモ・サピエンスのことばからは、暴力 と悪が生み出されるのだ。19

言語が自然から遠ざかれば遠ざかるほど、その暴 力が強まるように思われる。ネアンデルタール人が Oa という殆ど叫び声に近いことばによって自然の 諸現象の源を表象する能力は、言語が自然に密着し たところから得られるのである。 自然の力に満ちた 言語は、つねに新鮮である。これが、自然との接触 から切り離されて、ことばだけが独立して使われ始 める時、それは本来のコミュニケーション機能を失 い、内部に死を含んだものとなる。ネアンデルター ル人よりも、はるかに合理的で知的な生活を営んで いるにもかかわらず,新しい人間たちの共同体がい つもまとまらず、内輪もめと権力闘争、嫉妬、肉欲 に明け暮れるのは、お互い同士の本来的なコミュニ ケーションが成立していないからではないだろうか。²¹ 例えば、人間の最も根源的なコミュニケーションで ある性行為も,本来のコミュニケーション機能を失 って、内部に死を含んだものになっているのだ。つ

ぎの一節は,チュアミ(Tuami)とヴィヴェイニ(Vivani) の性行為をロクとフェイの眼を通して描いた場面で ある。

The two people beneath the tree were making noises fiercely as though they were quarrelling. In particular the fat woman had begun to hoot like an owl and Lok could hear .Tuami gasping like a man who fights with an animal and does not think he will win. He looked down at them and saw that Tuami was not only lying with the fat woman but eating her as well for there was black blood running from the lobe of her ear. (P. 175)

Their fierce and wolflike battle was ended. They had fought it seemed against each other, consumed each other rather than lain together so that there was blood on the woman's face and the man's shoulder. Now, the fighting done and peace restored between them, or whatever state it was that was restored, they played together. (P. 176)

この場合、'sex'は、むしろ暴力に近いものとなっている。作者は、この種のpattern を『可視の闇』 (Darkness Visible)の中でとりあげているが、『蠅の王』のジャック一味が雌豚を追いつめて槍で突き殺してしまう場面にも、この意味がこめられている。同じ自然現象や風景に接しても、サイモンとジャックのものの見方には大きな違いがある。サイモンが、五感を最大限に働かせて情景の微妙な変化を感じとろうとしているのに対して、ジャックには、このような鋭敏な感受性が見られない。感受性の欠如は、想像以上に恐ろしい結果を招くのである。

サイモンとジャック、ネアンデルタール人とホモ・サピエンスという異なった人物や人種の間の相違に見せかけながら、作者は我々の魂の内なる感受性と想像力の問題に鋭い疑問を投げかけているのだ。作者は、言語や性など、コミュニケーションの基本となる要素に注目し、それがどこで崩れ、どのように変質してゆくかを見つめている。風景に自然ののようなのる要素を配置し、その時時の変化、光と陰ののコントラスト、宇宙の壮大な眺め、水と光の織りなす情景、様々な動物の活動などを背景にして、登場人物たちが、これらの現象にどう反応するかを観察しているのだ。ネアンデルタール人の五感が捉えたダイナミックな自然の光景に比べて、ホモ・サピエンス

の眼から見た自然は、何とも殺伐としている。同じ 場面、同じ情景を捉えても、それらを知覚する魂の 感受性によってこれだけの差異が生ずるのである。 新らしい人間たちが感ずるのは、太陽の光と水面、 暗闇、それだけなのだ。そこには、自然の諸要素の ぶつかりあいも変化も生成も流動もない。単調で澱 んだ退屈な風景である。

The world with the boat moving so slowly at the centre was dark amid the light, was untidy, hopeless, dirty. (P. 225)

..., Tuami looked at the line of darkness. It was far away and there was plenty of water in between. He peered forward past the sail to see what lay at the other end of the lake, but it was so long, and there was such a flashing from the water that he could not see if the line of darkness had an ending. (P. 233) 水に反射して輝くこの光が、「新たな展望」22をひらくものとは私には思えない。ここにあるのは、「対立するものの総合」33ではなく、二極に分裂したイメージである。チュアミの心象風景には、ロクやサイモンに見られるような想像力が欠けている。彼は、'darkness'をのり越えるべきイメージを獲得しているのだろうか。

4

ネアンデルタール人の想像力は、人間と自然とが真に交感しあっているところに発揮されている連関を維持しておく一つの核となっている。ここで、彼らの女神 'Oa'は、両者の連関ロが、妻も子供も死んだ後、一人、森の中を彷徨会にかが、妻も子供も死んだ後、一人、森の中を彷徨会にから娘りクの骨を嗅ぎ出し、った焚火の灰の中から娘リクの骨を嗅ぎ出し、って彼女が始終携えていた 'Oa'の人形を掘りあてなが始終携えていた 'Oa'の人形を掘りある。女体を形どったその木の根っこを拾い上げ、ないでなが始終携えていたもるが、最後を下ではよった。彼は 'Oa'とコミニに超描しているのである。流れ落ちる彼の涙をもよって、この悲惨な現実をさらに戻をはしているのである。流れ落ちる彼の場所にもまする作者の筆は、この作品の他のどの場所にもますて精緻を極め、此の上もなく印象的である。それは、

『蠅の王』に於いて、仲間に殺されたサイモンが海へ流されてゆく光景にも似て²⁴ ロクの最後を飾るのにふさわしいものとなっている。

There was light now in each cavern, lights faint as the starlight reflected in the crystals of a granite cliff. The lights increased, acquired definition, brightened, lay each sparkling at the lower edge of a cavern. Suddenly, noiselessly, the lights became thin crescents, went out, and streaks glistened on each cheek. The lights appeared again, caught among the silvered curls of the beard. They elongated, dropped from curl to curl and gathered at the lowest tip. The streaks on the cheeks pulsed as the drops swam down them, a great drop swelled at the end of a hair of the beard, shivering and bright. It dctached itself and fell in a silver flash, striking a withered leaf with a sharp pat. The water rat scurried away and plopped into the river. (P. 220)

対象から一定の距離を保って描かれたこの場面は、 我々の想像力を此の上もなく搔きたてる。それは恰 も、読者がネアンデルタール人の知覚方法をそっく り譲りうけたかのようである。この距離をとらなけ れば、我々はロクの動作にあまりにも単純な反応し かできないだろう。此処の描写は、読者を「一呼吸遅 れて反応」させることによって、それだけ一層力強 いものになっている。この一節の意味は、いわば読 者の感受性と想像力に委ねられているのだ。

『後継者たち』になんらかの「展望」があるとすれば、それは結末の、「光」と「闇」に分裂したイメージの中に見出されるのではなく、むしろ、ネアンデルタール人の最後を描いたこの場面に反応する我々自身の魂の内にあるのではなかろうか。

注

- 1 フェルディナン・ド・ソシュール,小林英夫訳『一般言語学講義』(岩波書店,1972年),23-28頁,95-97頁参照。
- 2 ジャック・デリダ、高橋允昭訳『声と現象ーフッサール現象学における記号の問題への序論―』 (理想社、1983年)、144頁参照。
- 3 エドムント・フッサール,立松弘孝訳『内的時間意識の現象学』(みすず書房,1980年),151頁参照。
- 4 Bernard S. Oldsey and stanley Weintraub, The Art of William Golding (Bloomington

- and London: Indiana University Press, 1968), P. 51
- 5 Bernard F. Dick, William Golding (Boston: Twayne Publishers, 1967), P. 41
- 6 Virginia Tiger, William Golding: The Dark Fields of Discovery (London: Marion Boyars, 1976), P. 81.
- 7 デリダ、前掲書、147-152頁。
- 8 Arnold Johnston, Of Earth and Darkness: The Novels of William Golding(Columbia & London: University of Missouri Press, 1980), P. 25.
- 9 Robert O. Evans, "The Inheritors: Some Inversions" in William Golding: Some Critical Considerations, ed. Jack I. Biles & Robert O. Evans (Lexington, Kentucky: The University Press of Kentucky, 1978), P. 93.
- 10 Virginia Tiger, William Golding: The Dark Fields of Discovery, P. 84.
- 11 Robert O. Evans, "The Inheritors: Some Inversions," P. 91: "Thus, symbolically the roots of our nonrational ways of knowing and communicating may rest with this New One, the baby fathered by Lok and kidnapped to be fed at the breast of Vivani, the central female figure among the New Men."
- 12 Samuel Hynes, William Golding (New York & London: Columbia University Press, 1968), P. 22.
- 13 William Golding, *The Inheritors* (London: Faber and Faber, 1975), P. 34. 以下,『後継者たち』のテキストは、この版により、引用文のあとに()を付してページを示す。
- 14 Robert O. Evans, "The Inheritors: Some Inversions," P. 91.
- 15 Virginia Tiger, William Golding: The Dark Fields of Discovery, P. 82.
- 16 ジャン・ポール・サルトル、平井啓之訳「想像カの問題―想像力の現象学的心理学―」(人文書院,1983年),253―258頁。
- 17 Mark Kinkead-Weekes & Ian Gregor, William Golding: A Critical Study (London: Faber and Faber, 1975), P. 82.
- 18 Ibid., P. 70.

- 19 Robert O. Evans, "The Inheritors: Some Inversions." P. 98.
- 20 例えば, ルソー(Jean-Jacques Rousseau)は, 最 初の話しことばである歌の中に「母親の面影」 すなわち「自然の声」が認められなくなった時、 ことばも音楽も堕落したという。(ルソー、小 林善彦訳『言語起源論』[現代思潮社、1982年]。 145-150頁。) レヴィ=ストロース (Claude Lévi-Strauss)も、透明で無垢な音声言語(パ ロール) に及ぼす文字言語(エクリチュール)の 暴力を説くが、デリダ(Jacques Derrida)は、音 声言語の中に、すでにエクリチュールがあるこ とを指摘し、パロールとエクリチュールの対立 を越えたところに「原=エクリチュール」(痕 跡)の概念をもちこむことによって、レヴィー ストロースを批判している。(ジャック・デリ ダ,足立和浩訳『根源の彼方に-グラマトロジ ーについて一』 〔現代思潮社,1985年〕,上, 257, 277頁。)
- 21 クロード・レヴィ=ストロース, 荒川幾男, 生 松敬三,川田順造,佐々木明,田島節夫共訳『構造 人類学』(みすず書房,1984年),407-408頁。
- 22 Mark Kinkead-Weekes & Ian Gregor, William Golding: A Critical Study, P. 116.
- 23 Ibid., P. 118.
- 24 Bernard S. Oldsey and Stanley Weintraub, The Art of William Golding, P. 64, Virginia Tiger, William Golding: The Dark Fields of Discovery, P. 74.
- 25 Mark Kinkead-Weekes & Ian Gregor, William Golding: A Critical Study, PP. 111-112.